

総

括

昭和57年度から58年度前半までの研究の動向を概観すると三つの領域に分けることができる。

第1の領域は、入学者選抜に用いられている共通第1次学力試験、第2次試験の学力検査・面接・小論文・実技検査及び高校調査書が相互にどのような関係をもち、合格者決定にどのように寄与しているかを検討することと、これらの選抜資料が大学入学後の学習成果の予測にどれだけ貢献しているかを検討することに係っている。この領域は多くの大学においてかなり以前から研究が続けられており、第2次試験の学力検査に課する教科・科目の決定や1次・2次の配点比率の決定の参考となる成果が得られている。なお、調査書については学習の記録の評定平均値の平均や成績概評を用いた研究だけでなく、高校で選択履修した科目別に合格率を比較すると、行動及び性格の記録と大学入学後の成績との関連を検討するなどの研究が行われていることは、調査書を選抜に活用する新しい方向を示唆するものとして注目される。

第2の領域は、推薦入学とか2次募集のような一般的選抜方式と異なる選抜方式についての研究である。これらの方式を採用している大学の研究成果によると、推薦入学による入学者は留年率が低く、学内成績が良いという傾向があるようである。また、推薦入学者が一般入学者に対して抱くコンプレックスは第3、4学年へ進む頃は稀薄になっているという。一方、2次募集については共通第1次学力試験の成績が良

い反面、上位合格者の入学辞退率が高い、入学後の退学率が高いなどの傾向が報告されている。入学後の成績については差がないという報告もあるが2次募集入学者に成績の下位の者が多いという報告もある。そこには学習意欲の重要性や入学者の指導についての研究の必要性が示唆されている。

第3の領域は、志願者や合格者の示す選択行動についての研究である。その中で最近注目されているのはいわゆる「輪切り」現象である。これに関しては共通第1次学力試験の成績について大学ごとの受験者集団の得点分布を全国得点分布と比較し、年次変化を研究している大学が多い。前者の分布幅が年々狭くなり標準偏差が小さくなる傾向がみられる大学があり、受験者倍率が低下する傾向にある大学もある。ただし、現在のところ受験者倍率の低下は合格者の学力水準の低下をもたらしまでには至っていないようである。また、合格者の中で入学を辞退する者の比率は最近むしろ減少しているが、入学辞退は県外の高校卒業見込者（現役）に発生率が高く、また試験成績と辞退率とは無関係であるという結果が得られている。

以上三つの領域に分けて研究動向を述べたのであるが、次に九つのテーマを設定し、それぞれ関連のある研究動向や研究成果を述べることにする。なお、テーマごとに叙述のスタイルが若干異なっている点やテーマ間に多少重複する部分があることをお許しいただきたい。